迷い夜行―紅牢夢―

初瀬　泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
迷い夜行―紅牢夢―

【Ｎコード】
Ｎ５０５２Ｚ

【作者名】
初瀬　泉

【あらすじ】
この世のあとあの世の境界、三途の川の中州にある常世の町。
管理者の娘ユズリと、人を探して町に迷い込んだ遊佐が出会って一ヶ月。
町に出現した辻斬り。
それは生者死者異形の区別なく、ひたすらに血の雨を降らす。

序（前書き）

迷い夜行―紅牢夢―は『迷い夜行』、『迷い夜話』の続編となります。未読ですと不明な点が多くあると思いますので出来れば前作、前前作を読了後にお読みください。

序

御方様（おかたさま）はわたくしには赤が一番似合うと仰って下さいました。
御自分も赤が最も好きな色なのだ、とよく仰っておられました。
ですからわたくしは御方様の選んで下さる、御方様の愛する赤い衣がとてもとても好きだったので御座います。
御方様がわたくしのために特別にあつらえて下さった、真っ赤な椿の縮緬細工（ちりめん）の髪飾り。
わたくしの肌によく映えると、真っ赤な紅をお取り寄せ下さいました。
そして赤紅（あかべに）、真朱（しんしゅ）、緋色、猩々緋（しょうじょうひ）、京緋色（きょうひいろ）……。御方様は様々な赤の衣を仕立てて下さいました。
ですがわたくしに最も似合うのは純然たる赤だと御方様は仰いました。
赤は太古の昔より生命の色。
その色こそがわたくしに似合う、と。
お部屋には他にもたくさんの赤いお道具が溢れておりました。御方様とわたくしはそこで赤というこの世で最も美しい色に囲まれ、幸せな時を過ごしたのでございます。
けれど下賤な輩は御方様の愛する赤で溢れる部屋を見ては悪趣味だと罵り、繊細な御方様を傷つけたのでございます。
お可哀そうな御方様。
ああ、どうかそんなお顔をなさらないで下さい。
貴方様にはわたくしが居ります。
貴方様の憂いを取り除くためでしたら、何でも致します。
だからどうかどうか、笑って下さいまし――。？

終幕のための開幕　1

三途の川の中州、生と死の境界。
そこには夜だけの町がある。
明けることのない常夜の町はあらゆる境界であるがゆえに曖昧だ。
町は無数の橋によって幾多の此岸（しがん）と繋がっている。だからここには様々なモノが存在する。生者も死者も異形も当たり前に行き交う。
ある者は死後、冥府に進むことを拒み。
ある者は生きながらに境界に迷い。
ある者は自ら選択して生死の概念すら曖昧な町に遊ぶ。

当代管理者の娘、ユズリは生きながらに町に出入りする人間だ。そのため四六時中この町にいるわけにもいかず、此岸の生活に謀殺され町から足が遠のくことがなくもない。だがそうしているうちにも町でも時は進み、時には町での生活に関わるような事件が起きていることもある。
それをいち早く知るには管理者である父・シノに聞けば話は早いのだが、管理者というのも暇ではない。ただ町へ行けば会えるとは限らず、冥府に呼び出されていればそうそう呼び戻すことも出来ない。
そうした時、町での情報を知るのに役立つのが瓦版（かわらばん）だ。江戸時代に見られた瓦版とほぼ同じもので、一枚の紙に時事性の高い最新情報から時には冥府からの御触れが記され、あちこちで売り歩かれる物。
町では最も人通りの多い大通りや、此岸との出入り口である橋の近辺に貼り出されたりもする。何しろ危険も多い町だ。情報は少しでも多い方がいいということで安価に情報を知ることが出来るため

重用されている。安価な分だけ裏通りをねぐらにする情報屋ほど詳細ではないが、わざわざ危険の増す裏通りにまで行きたくない者にとって瓦版は欠かせない情報源なのだ。

そしてユズリもその安価な情報源をよく利用する。ガセネタやゴシップまがいの記事が少なくないでもないが、冥府からの重要な御触れなどは確実に知ることが出来るので、情報屋を頼るほどでもない時はそれで十分なのだ。

さて、そのユズリは毎晩のように町にやってくる時期でも、とりあえず瓦版が売られていれば周囲の購入者達の様子を見て面白そうなら購入する。

そして今日は橋を渡って町に入ってすぐ、瓦版を売り歩いている読売の周りには人だかりが出来ているのが見えた。

終幕のための開幕　2

「さぁ冥府がついに本腰を上げた！　既に被害者は十を超え、先日の代表者会議で代表者達に冥府からがお達しがあったそうだ！　何としても真赤姫（まあかひめ）を捕縛せよ、そのための手段は問わず、場合によっては魂の滅絶をも許可すると！」

読売の声に周囲がざわめく。

当然だ。

魂の滅絶はこの町で定められた数少ない法の中でも第一級犯罪。此岸で言うなれば殺人と同じ意味だ。

この町には生も死もない。つまり死ぬことはない。

理屈は分からないがこの町では生者も肉体ではなく死者同様、魂だけの存在となるらしい。普段は肉体の内側にある魂が町に立ち入った時だけ肉体を覆うように外側に出てくるとでも言うのだろうか。

だからここではいくら肉体が傷を負っても致命傷にはならない。町を出て此岸に戻ればいつの間にか魂は肉体の内側に戻り、ずっと内側にあった肉体には傷一つついていないのだ。もっとも、肉体は無傷といってもそれは表面上のもので、その内側の魂は傷ついている。外科的には全く傷がないはずの肉体が魂に呼応するように痛みはする。けれどそれは肉体的には何の問題もない。此岸で病院に行っても原因不明と言われるだろう。まさか魂が傷つけられました、治して下さいと言っても治すことのできる医師は此岸にはそうそういないだろうし、そもそも信じてくれる医師がいるとは到底思えない。

そういうわけでこの町に死はない。いくら魂が傷ついても肉体が無事ならそれは死ではないから。冥府のいう死の定義は肉体の死なのだから。

だが死はないが、終わりはある。

魂を傷つけても死にはしない。

ただし魂そのものを再生不可能なまでに傷つけることはできる。
肉体に自己再生能力があるように、魂にもある程度の傷ならば自己修復する機能が存在する。ただしそれには限界がある。
魂の滅絶とは、その限界を超えるまで魂を傷つけること。自己再生も及ばない程に傷を負わせ、この世からもあの世からも境界からも消し去ること。
此岸で言う死が肉体の死を示すなら、この町で言う死は魂の死と言っていいかもしれない。
魂が滅べば次はない。冥府に行って罪を濯ぐことも、新たな生を受けるべく生まれ変わることもできない。
だからこその重罪。
それを冥府が許可した。それは事態がそれだけ異常であることを示す。魂を殺し、冥府で裁きを受ける権利を奪い、あらゆる可能性を奪ってでも下手人を捕獲しなければならないと判断された事態。
幼い頃からこの町に出入りするユズリですら、そんな事例を目の当たりにするのは初めてだ。
初めてお目にかかる事態にユズリは少々の興奮を覚えながら人だかりを掻き分けながら読売へと近づいて行った。
髷(まげ)を結った読売は紙を片手に掲げ、話を続ける。
「始まりはこの町の裏通り、冥府にもほど近い暗闇で。冥府の把握する魂が七つ、一日の間に消滅した。冥府のお役人が駆け付けると辺りは血に染まり赤一色だったそうな。辛うじて生き延びた二人の証言によれば、下手人は真っ赤な着物を幾重にも着た、まるでどこぞの姫御前(ひめごぜ)のような若い女だったとか！　しかしその右手には血に染まった刀剣が握られていたそうだ！」
辺りに恐怖と好奇の混じった声が上がった。その中でユズリは息を飲んだ。
およそ一ヶ月前に町を訪れ、父の命令でここ最近ずっと行動を共にしていた男、遊佐(ゆさ)。人形じみた風貌の彼は、人を探してこの町まで来たと言う。

――多分、高確率で赤い打ち掛けを羽織っている。
――それから柄が赤い脇差(わきざし)を持っている。多分抜き身だろうな。
初めて会った時に彼はそう言った。
赤い着物、赤い脇差。
それは読売の言う下手人の風体に一致する。
ユズリは気が逸るのを抑え込みながら読売の話の続きを待った。

終幕のための開幕　3

「しかしそれでも行方も素性も杳として知れない。冥府から派遣されたお役人と番所が総出で調査を開始したが、下手人の影も形も掴むことは出来ない。そうこうしているうちにまたこの裏通りで魂が五つ、消えた。今度は生存者もいない、目撃者もいない！　誰ひとり生き延びることも出来ずに赤い血の海だけが残されていた！　そしてまた起きた！　一つ魂が消え、五人が重傷を負いながらも生き延びた！　五人の生存者兼目撃者によれば、下手人はやはり赤い着物の女だと言う！　そして冥府はその顔すら分からぬ赤い着物の女を真赤姫と呼び、第一級犯罪をたやすく犯す恐ろしき大罪人として町全体に厳戒令を発した！　腕に自信のない者は裏通りへは近づかぬよう、自信のある者は代表者達に助力するか真赤姫の情報を集めるようにと！　さぁこれが真赤姫の人相書きだ！」

そして読売は手にしていた紙を勢いよくばら撒く。

落ちた人相書きを拾う者、より詳細な情報を知る者はないのかと読売に詰め寄る者などで周囲はさらにごった返した。

小柄なユズリは人ごみに飲まれながらも何とか読売のもとまで辿りついた。

「人相書き、一部ちょうだい！」

何とか人ごみを掻き分けて読売の前まで出ると、読売が驚いたような声を上げた。

「おや、ユズリお嬢さん。珍しいですね、お嬢さんがわざわざご自分からあっしの元までいらして下さるとは」

確かに、いつものユズリなら人が減るのを待ってから管理者の娘という立場を大いに活用し、瓦版が既に品切れとなっていても強引に刷らせて自分の元まで持って来させている。

だが今回はそんな時間すら惜しい。

父の口車に乗せられ此岸の時間において早一ヶ月。いい加減何か

しら遊佐の探し人の手掛かりでも掴まねばまたからかいの種にされるに決まっているのだ。
手掛かりがあるなら一刻も早くそれを受け取り、探し人とやらを探して遊佐の前に引っ立てなければ。
「いいから、一部ちょうだい。真赤姫とやらの人相書き」
肩で息をし、乱れた髪を直しながら読売に手を伸ばす。
「へい。これでさぁ」
そう言って読売が差し出してきた紙にはまるで浮世絵のように鮮やかな絵が描かれていた。
そこには赤い衣を幾重にも纏い、その手には日本刀らしき刀剣を持った女が描かれている。そして刃は決して長くない。
ユズリは人相書きを受け取り、読売を見た。
「この下手人が持っている刀剣は、目撃者の証言を元に描いたの？」
「そうらしいです。この町には色んな種類の刀剣があるでしょう？
何でも冥府のお役人が金物屋の旦那の店へ目撃者を連れて行って、真赤姫が持っていたのに一番近い刀剣を探させたとか」
「八卦院（はっけいん）の店へ……」
様々な世界の武器が横行するこの町では刀剣と言われただけでは特定は難しい。だが八卦院の店なら町中のありとあらゆる武具が揃っている。そこで最も近い形の刀剣を探し、その刀剣がどの此岸の物なのかを検証するだけでも下手人の素性に繋がる可能性は高い。
「ってことは、八卦院のところへ行けばもう少し詳しくわかるかもしれないってことか」
「ユズリお嬢さんも真赤姫の捕縛に名乗りを上げるんですかい？
シノの旦那が心配しますぜ？　あっしもこの町じゃ長いが、魂の滅絶なんてぇ大罪をこんなにも多く犯した馬鹿は聞いたことはねぇ。
冥府も相当危険視しているようですし、お嬢さんも今回はやめておいたほうが……」
「何よ。私じゃ他の代表者に、折継（おりつぐ）とかにまで劣るって言うの？」
心配してくれることには感謝するが、折継の下に置かれることは

我慢ならない。
「い、いえ、そういうわけじゃ……」
読売は慌てて目を逸らし、「お嬢さんはお強いですから心配いりやせんでしたね」などと言いながら別の連中に人相書きを配り出した。
ユズリは人相書きを折り畳みながら人だかりを後にした。
まずは遊佐と落ち合うのが先決だ。件の真赤姫が本当に遊佐の探し人かどうかも現状では不確かなのだから。一人意気込んで行って別人でしたでは笑い話だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5052z/

迷い夜行―紅牢夢―

2011年12月23日01時57分発行